

ISSP 2010 に見る日本の Rationalist / Arcadian デイバイド

——科学観・高等教育観の計量社会学——

京都大学 山本耕平

1 目的

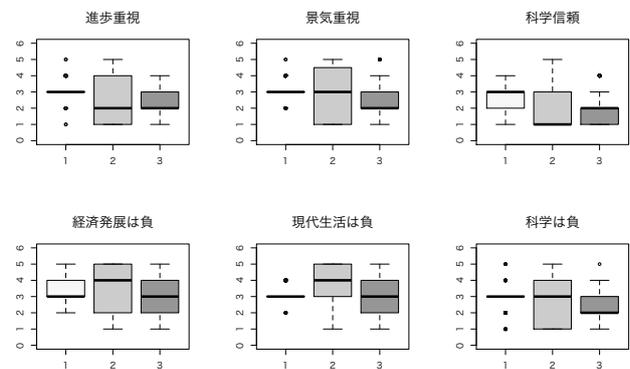
この報告の目的は、環境問題の認知と科学・技術への懐疑に関する意識のデータを用いて、科学観の分布を探索的に析出し、その分布に関連する要因を検討することである。環境問題のリスクを認知する人、もしくはしない人の中での科学にたいする認識の差異に焦点を当てることで、一般論としての科学観を検討するよりも、科学観の内実を解釈しやすくなることが期待できる。

2 方法

環境に関する意識項目を含む ISSP 2010 の、日本のデータ (N=1,009) を用いる。Reyes (2015) などの先行研究で用いられている 8 つの意識項目を因子分析によって検討した結果、因子負荷量が低い 2 項目を除いた 6 項目を環境問題と科学・技術に関する意識項目として採択した。具体的には、「人類の進歩が環境を損なっていることを、人々は気にしすぎている」などの、環境問題を楽観視する態度を示す 3 項目と、「全体として、科学は人類にとって良いことよりむしろ悪いことをもたらした」などの、科学・技術への懐疑を示す 3 項目である。次に、これら 6 項目への 5 件法での回答をカテゴリカル変数とみなし、回答者の性別などの共変量を含む潜在クラスモデルを推定した。

3 結果

BIC の比較と解釈可能性から 3 クラスモデルを採択した。6 項目にたいする回答の分布をクラス間で比較すると (下図。得点が高いほど賛成に近い)、クラス 1 は回答が中間に集中している中間層であり、他の 2 クラスを Reyes (2015) の分類に則して解釈すると、クラス 2 は相対的に環境問題を楽観視していない (上段 3 項目の回答が反対に近い) が、科学・技術への懐疑も相対的に強い (下段 3 項目が賛成に近い) Arcadian、クラス 3 は Arcadian と同じく環境問題を楽観視していないが、一方で科学・技術への懐疑は相対的に弱い Rationalist に相当する。各クラスへの所属確率 (基準は中間層) と共変量との関連は下表に示した。性別、学歴、一般的信頼によって、Arcadian に属するか Rationalist に属するかが分岐することが見て取れる。



4 結論

学歴を科学・技術に関する知識の指標として解釈するならば、知識と信頼の高低によって科学・技術への肯定的態度と懐疑的態度が分岐していることが示唆された。

文献

Reyes, J. A. L., 2015, “Cross-Section Analysis of Attitudes to-

wards Science and Nature from the International Social Survey Programme 1993, 2000, and 2010 Surveys,” *Public Understanding of Science*, 24(3): 338-57.

	Arcadian / 中間層		Rationalist / 中間層	
	係数	SE	係数	SE
切片	1.34*	0.61	-0.53	0.50
女性ダミー	-0.79**	0.24	-0.10	0.18
年齢	-0.03***	0.01	-0.02**	0.00
大卒ダミー	0.10	0.25	0.59**	0.19
一般的信頼	-0.40***	0.11	0.25**	0.10
居住地都会度	0.22	0.12	0.23*	0.10

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$